



## 会議レポート

### DICOMO2016 開催報告

#### —出席者 396 名の会議を 運営した事務局から—

#### 20 周年を迎えた DICOMO

DICOMO は、その正式名を「マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム」といい、毎年初夏に開催されるシンポジウムです。その成り立ちは 1997 年までさかのぼります。第 1 回の DICOMO は北海道ニセコで開催され、3 つの研究会の共催で約 145 人が参加した会合でした。それが現在では 10 の研究会が共催し、約 400 名が参加する大きなシンポジウムに発展しました。

DICOMO2016 は「DICOMO20 周年 飽くなき追究が拓く未来」を統一テーマに設定し、特別招待講演や研究会が企画したパネルセッション、デモ展示など 272 件の発表が行われました。このレポートでは、396 名が参加した 20 回目の DICOMO を運営者の視点で振り返ります。

#### DICOMO2016 の伝統

DICOMO には、代々引き継がれているいくつかの伝統があります。その 1 つが「参加者全員が会するお座敷での夕食」です。初めての参加者はその光景に圧倒され、ベテラン参加者はその光景を見ることを楽しみの 1 つにしていると聞きます。しかし、この光景を維持することが近年難しくなっています。大きな宴会場を有する宿泊施設が減っているためです。DICOMO2016 ではセッション会場と夕食会場を共有することで、この問題を解決しました。

「会場を共有」と書くと非常に簡単なイメージを持たれるかもしれませんが、その裏には大変な作業がありました。セッション会場は頻繁に人が出入りするので靴を脱ぐ和室は適しません。一方、夕食には座敷が必要です。両方を 1 つの会場で共有するためには「土足で入れて、清潔に座れる和室」を実現しなければなりません。ホテルの方と相談の上、400 畳を超える広大な宴会場をゴムシートで覆いつくすという対応をとることにしました(図-1)。



図-1 ゴムシートで覆ったセッション会場(左隅に畳が見えます)

転換作業は時間との闘いです。そのため、一般セッション直後に夕食がある 1 日目は不可能です。必然的に 2 日目の夕食がターゲットとなりました。一般セッション後の特別招待講演とデモセッションが行われる約 3 時間で転換を図ります。セッション会場に設置されたプロジェクタやスクリーン、机 50 台と椅子 150 脚を一時的に撤去し、付着した砂などが畳に落ちないように注意しながらゴムシートを外し、畳に約 400 個のお膳と座椅子を並べなければなりません。

セッションが予定通り終了するや否や、ホテル従業員の方々が一齐に作業に着手。手際よく椅子の片づけをしていきます。事務局員と学生アルバイト・ボランティアのメンバもスクリーンやプロジェクタを急いで撤去しました。制服や作業服ではなくスーツ姿の従業員の方もおり、総出で対応してくださったようです(この作業の様子を撮り逃したのが残念でなりません)。

かくして、夕食時間には参加者の皆様に一切の不自然さを感じさせることなく、DICOMO 名物の夕食会場は完成しました。当然ですが、3 日目は朝から一般セッションがあります(図-2)。ホテルの方によれば 23 時くらいには元のセッション会場に戻ったとのことでした。

#### 参加者のピークに備える現地交通対応

DICOMO の運営にあたっては、現地の交通事情にも気を付ける必要があります。参加者の大半は開会式に間に合うように会場に到着し、閉会式の終了とともに帰路に就きます。そのため、交通機関の需要が特定の時刻に集中します。事務局は需要の平滑化を図るか、ピークに耐える策を準備する必要があります。今回の会場は鳥羽駅からバスで 10 分の距離にあり、徒歩は現実的ではありません。また、ホテルが所有するバスだけでは電車一度に到着する参加者には対応できません。

事務局では、参加登録時のアンケートや参加者の所属組織から想定される経路、駅前食堂マップなどを駆使してシミュレーションを重ねました。最終的には、観光バスを 1 日目は 2 台、3 日目は 3 台用意することにしました。1 台で 45 ~ 50 名が乗車できるため、ホテルのバスと合わせて 150 ~ 200 名近い参加者を一度に運ぶこと



図-2 DICOMO 名物の夕食会場 (2日目)

ができます。私は事務局に詰めていたので現場を見ていませんが、担当者からは大きな混乱はなかったと報告を受け、安心しました。

ところで、バスの手配には費用が発生します。参加者の中にはバスに乗らない方もいるので不公平感が出ないように注意しなければなりません。今回は、事務局で使用する備品を見直して支出を抑えたり、助成金を申請したりして、バス代を捻出しました。

## 20周年特別セッション

事務局の裏話だけではレポートになりませんので、セッションの様子も報告したいと思います。DICOMO2016は20回目の節目にあたるということで、各研究会に20周年特別セッションの開催を依頼しました。いくつかの研究会では対象分野の研究を振り返って将来の方向性を議論するパネルが開催されました。また、著名な研究者を招いて招待講演を行った研究会もありました。

一例としてユビキタスコンピューティングシステム(UBI)研究会では、『ユビキタス過去・未来』と題して徳田英幸先生(慶大)、戸辺義人先生(青学大)、椎尾一郎先生(お茶の水女大)、角康之先生(はこだて未来大)、大内一成氏(東芝)によるパネルセッションを開催しました。豪華なパネリストの登壇に、会場には非常に多くの参加者が集まりました。また、マルチメディア通信と分散処理(DPS)研究会が主催したセッションでは日本IBMの串田高幸氏が『クラウドのモデルと先進技術』と題した講演を行いました。メインのトピックに加えて、ご自身が研究に取り組む際の姿勢を披露され、若手研究者にとっては良いアドバイスとなったようです。

## 特別招待講演

例年、DICOMOでは特別招待講演を企画していますが、講演者選びは難しい作業です。当初、事務局からは流行中の人工知能や自動運転をテーマとして推薦しましたが、同じ研究者コミュニティから選定しても意味がないとの意見が多数出ました。プログラム委員会で議論を重ねた結果、SF作家の藤井太洋氏のご講演が実現しました。第一線のエンジニアでもあった藤井氏はDICOMOの関連分野に豊富な知識をお持ちで、さまざまな逸話が披露されました。参加者は研究者コミュニティとは違う新しい視点からの意見や期待に、良い刺激を受けていたようです。

## デモセッション

デモセッションには14件のデモが集まりました。この件数は当初の想定を大きく上回っており、例年実施していた企業展示を中止せざるを得ないほどでした。会場も手狭になってしまい、参加者の方にはご不便をおかけしてしまったことと思います。

発表されたデモは参加者の方々の投票と審査員の採点に基づいて、野口賞という特別な賞が与えられます。昨年度までの一般投票は「最も良かったデモを1件選ぶ」というものでしたが、今回は2軸評価を導入しました。デモで実証しようとしている技術そのものの評価と、その技術を効果的にアピールする表現力の評価です。結果として集計に多くの時間を要してしまいましたが、これまでよりも基準が明確になったのではないのでしょうか。

## 後記

約1年間にわたって携わったDICOMO2016の運営は1つの区切りを迎えました。細かい問題はいくつか発生したものの、投稿件数や参加者数は例年水準を維持し、新設したジュニア会員枠での参加もありました。私は全体として成功だったと判断していますが、参加された皆さまはいかがでしたでしょうか。DICOMO2017の開催も決まっています。ますますDICOMOが盛り上がることを期待して、レポートを終えたいと思います。

(石原丈士 / (株) 東芝)